

近畿中部防衛局主催 舞鶴市共催  
明治150年記念セミナー  
「旧軍港からの遺産 ～海と歴史のメモリー～」

日 時： 平成30年6月23日（土）  
場 所： 舞鶴市総合文化会館  
講 師： 防衛省防衛研究所 所員 金澤裕之氏  
「近代海軍の歴史」  
日本イコモス国内委員会委員長（神戸芸術工科大学教授）西村幸夫氏  
「日本の20世紀遺産20選」  
舞鶴市副市長 堤茂氏  
「舞鶴の歴史文化遺産を活かしたまちづくり」

**【局長挨拶】**

近畿中部防衛局長の藤代でございます。

本日は、大変ご多忙のところ、また、足下の悪いところ、防衛問題セミナーにご来場頂き、ありがとうございます。

今年、明治元年から起算して150年に当たります。我が国は、明治期以降、様々な近代化への取り組みを行い、近代国家としての国の礎を築きました。

ここ舞鶴市においては、明治34年に鎮守府が置かれ、当時の最先端の技術を集めて建てられた赤レンガ倉庫など歴史的な建物が多く残っておりますので、改めて明治期を振り返り、更に今後我が国が飛躍していくために明治150年の記念セミナーを政府の一員として開催することになりました。

第1部では、地元の若者を代表して、伝統ある東舞鶴高校の書道部の皆さんに書道パフォーマンスをご覧頂きます。次世代を担う若者の躍動感あるパフォーマンスを楽しんで頂きたいと思えます。

第2部では、まず、近代海軍の歴史に詳しい防衛研究所の金澤さんからお話を頂きます。

そして、都市計画の専門家で大変高名な西村先生から海軍施設と舞鶴市の都市計画についてお話を頂きます。

また、舞鶴市から赤レンガを活かしたまちづくりについて話しをして頂きます。

最後は、海上自衛隊舞鶴音楽隊による素晴らしい演奏を楽しんで頂きたいと思えます。

今回のセミナーが明治150年を振り返る一助となり、今後益々の我が国の発展と舞鶴市の発展につながる有意義な時間となることを願っております。

最後に、本日のセミナーを開催するに当たりましては、多くの関係者の皆様のご支援とご協力を頂きました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。本日は、ありがとうございました。

…………… 講演内容：以下のとおり ……………

## 第2部 講演

### 1 「近代海軍の歴史」

#### 【司 会】

第2部の講演を始めさせていただきます。

第2部の講演1は、防衛省防衛研究所 金澤裕之（かなざわ ひろゆき）3等海佐の講演です。

金澤3等海佐は、慶応義塾大学、同大学院で日本史を専攻し、平成14年に海上自衛隊に入隊。その後、防衛大学校で安全保障学の博士号を取得し、海上幕僚監部などを経て、平成28年3月から防衛研究所戦史研究センター国際紛争史研究室において、幕末海軍の専門家として日本における近代海軍の建設を研究しています。昨年5月に出版された著書「幕末海軍の興亡」で、安全保障研究の分野で成果を挙げた研究に与えられる「猪木正道賞」を、防衛省職員として初めて受賞しました。

本日は、「近代海軍の歴史」と題して、講演します。

それでは、金澤3等海佐、よろしくお願いいたします。

#### 【金澤裕之氏】

皆様、こんにちは。ただいま、ご紹介頂きました防衛研究所の金澤です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

本日は明治150年記念セミナーの1つ目のお話として、「近代海軍の歴史」と題して30分程、お付き合いを頂きます。

海軍と言っても日本海軍、帝国海軍、海軍基地と様々であり、その定義をあまり気にすることなく、漠然としたイメージで使うことの方が多いため、その定義について確認をしておきたいと思います。

海軍とは何か、安全保障論における最大公約数的な定義は、海洋、河川、湖沼の水上及び水中に展開する軍事力です。この中には水上艦艇、潜水艦、艦載機などだけではなく、これに関連する陸上や宇宙空間の基地、ミサイルなども含まれていますが、紀元前480年、サラミスの海戦を戦ったギリシャ艦隊から現在各国で活動している海軍まで含めた非常に幅広い概念です。

さらに、本日の主題となる近代海軍というものに焦点を絞るとどうなるのでしょうか。例えば、今から500年ほど前に、この地で活躍した丹後水軍が、今、北吸岸壁に係留されている護衛艦に乗り組んで活動したら、それは近代海軍になるのかといいますと、それは近代海軍ではなくて、あくまで近代的な兵器を装備した水軍でしかありません。20世紀に活躍したイギリスの海軍史家マイケル・ルイスは、近代海軍を海軍のうち Permanent、National、Maritime、Fighting、Force、この5つの要素を具備したもの、即ち「国家の所要に属した恒久的な組織で、国家の支出により維持される、海上を活動の部隊とする軍事力」、これを近代海軍と定義しました。

では、日本に近代海軍が誕生したのはいつのことでしょうか。日本人のイメージの大半を占めているのが、今から150年前に起きた明治維新を基点とする一

連の海軍建設になるかと思えます。しかし、我々はここで1つの問題点にぶつかることとなります。一流の近代海軍をゼロから作り上げるには、約100年かかると言われています。イギリスが世界に冠たる海軍国として名を馳せたのは19世紀初頭のナポレオン戦争ですが、近代海軍がイギリスに誕生したのはそれから約150年前、17世紀半ばとされています。18世紀末の独立戦争で誕生したアメリカ海軍が、活躍を始めたのはそれから約120年程経った米西戦争の辺りからです。

では、日本はどうでしょうか。仮に明治維新から起算すると、海軍誕生から26年後に日清戦争、36年後に日露戦争を迎えることとなります。産業革命で近代化のスピードが格段に増した19世紀以降の世界でも、これはあまりにも早すぎるわけです。まず、人材養成が追いつきません。そこで日本の近代海軍というものを考える上で、明治維新以前に目を向けていく必要があります。本日は日本の近代海軍を題材に、明治維新史研究の永遠のテーマ近世と近代の連続と断絶について考えてみたいと思います。

本日は主に明治維新前後の海軍建設、海軍と共に成立した各地の軍港、そして舞鶴と海軍、海上自衛隊について見ていきます

始めに、日本の海上軍事の歴史について、ご説明いたします。日本列島における海上軍事力の正確な起源を明らかにすることは出来ませんが、その地理的特性から古代日本人は軍事技術の発展と共に、その軍事活動の場を水上、海上へと広げていきました。記録上、最初に大規模な海軍力の動員が行われたのは663年の白村江の戦いです。12世紀後半に繰り広げられた治承・寿永の乱、いわゆる源平合戦では、源氏・平氏両軍が関門海峡で決戦した1185年の壇ノ浦の戦いで最終的な勝敗が決しています。この時、両軍の勝敗を左右したのが海賊衆です。この海賊衆や警固衆といわれる海上集団は、はじめ沿岸部の独立勢力として、戦国時代に入ると大名の軍事力の一部である水軍として交易、戦闘、交通などに活躍するようになります。毛利元就が陶晴賢を滅ぼした1555年の厳島の戦い、1575年から1580年にかけて行われた織田信長の石山本願寺攻め、いわゆる石山合戦、水軍がどちらの側に付くかは時として戦国大名の存亡を左右しました。1600年に江戸幕府が成立すると、水軍は船手と称されるようになり、引き続き将軍や大名の海上軍事力を担いますが、1615年の大阪の陣を最後に、船手が実戦に投入されることはなくなり、更に1635年の大船建造禁止令により船手の軍船は外洋航海能力を失い、以後、船手は入港船舶の管理や水害などに出動する水上警察的な存在となっていきます。そして1630年代、三代将軍徳川家光の頃になると、海賊衆以外の旗本も船手頭に任命されるようになり、幕府の船手は海賊衆がその勢力ごと幕府の海上軍事を担う存在から幕府直轄の海上軍事力へと転換していきます。つまり国家の所有と支出、永続的な組織という条件が揃いますが、これをもって幕府の船手を近代海軍と呼ぶことには、やはり無理があります。例え船手とその人員制度で蒸気軍艦を運用したところで、それは近代海軍ではなく、洋式化された水軍でしかないわけです。18世紀末以降、度重なる外国船の来港に伴い、日本では林子平の「海国兵談」に代表されるよ

うな、海岸の防備態勢に関する議論、いわゆる海防論が盛んになってきます。各地の沿岸砲台の整備や和洋折衷型の小型帆船の建造など、江戸時代の後期から軍事力の強化が緩やかに取り込まれていきますが、その成果が十分なものとなる前に日本は1853年のペリー来航を迎えることとなります。砲艦外交の現実直面した江戸幕府は、近代的な海軍組織の創設を決断します。ペリー来航から2年後となる1855年、ヘルハルト・ペルスライケン中佐を長とするオランダ海軍教官団が来日し、彼らがオランダから回航して長崎で幕府に贈呈した蒸気軍艦ヤッパン号、後の観光丸を用いて海軍教育が始まりました。

長崎海軍伝習と言われるこの教育は、幕府の家臣団を対象に幕府の経費で運営されたものですが、その特徴の1つに諸藩の家臣にも門戸が開かれた点が挙げられます。長崎海軍伝習は1857年5月、江戸に軍艦操練所が開設されたことから、1859年2月に終了となりますが、ここで学んだ幕府及び諸藩からの派遣学生が、勝海舟を始めとする海軍第1世代を構成していきます。

日本に海軍が創設されてから5年、1860年に日本は史上初となる軍艦を海外派遣に踏み切ります。アメリカとの間に締結された日米修好通商条約批准のためワシントンに派遣される外交使節団の護衛として選ばれたのが幕府軍艦咸臨丸です。咸臨丸は1857年にオランダから10万ドルで購入したスクリュー式の蒸気船で、排水量625トン、全長約49メートルという小型艦でした。現在の海上自衛隊の最大の船である「いずも型」護衛艦と比較すると、排水量で1/30、長さで1/5という大きさになります。

この時に咸臨丸が経験した浦賀・サンフランシスコ間の往復83日間、10,775マイルの航海は、日本海軍が経験した初めての外洋航海であり、海軍創設から5年で太平洋横断航海を成し遂げた日本人に全米が驚愕し、咸臨丸乗員は各地で大歓迎を受けています。咸臨丸渡航の成功は、日本の政治指導層に蒸気船の有用性を認識させることとなり、日本の海軍は訓練の組織から実動の組織へと大きく転換していきます。特に幕府海軍は輸送、警備、測量、搜索、救難と多岐にわたる実動任務に投入され、保有する艦船は、ほぼ常時フル稼働状態でした。

海軍の三大機能の1つにパワープロジェクト、戦力の投射というものがありますが、特に高い機動性を生かした輸送任務は、それまでの日本の交通事情を一変させることとなります。当時の記録を見ると、幕府の軍艦は江戸の品川から兵庫までを最短3日間で移動しています。同じ頃、14代将軍徳川家茂が江戸から大阪まで陸行で37日間かけて移動していることを考えると、蒸気船の導入が日本に一種の交通革命をもたらしたことが分かります。海軍の建設によって新たに必要となったのが、建造・修理のための施設と蒸気船に石炭を供給するためのシステムです。日本は洋式帆船の時代を飛ばして蒸気海軍をスタートさせたため、蒸気機関の整備のための設備とドックのような船のための設備を一度に作り始めなければなりません。日本に蒸気船が導入された当初は、神奈川県にある浦賀港の一角を完全に閉鎖して、一時的に水を抜いて船体を整備するといった方法がとられました。しかし本格的な造修施設の必要性は明らかであり、1861年には長崎製鉄所が、1865年には横須賀製鉄所が設置され、この両施設はそ

の後の日本の造船業を支える二大拠点となっていきます。

石炭はと言いますと、日本は陸上の蒸気機関車よりも前に蒸気船を大規模に導入するという、やや特異な産業の近代化を行ったため、海軍建設と同時並行で給炭システムきゅうたんの構築を行わなければなりません。当時は、既に北は北海道から南は九州まで、全国各地で石炭が商業ベースで採掘され、長崎では外国船からの需要に応える形で石炭が販売されていました。幕府も兵庫に石炭会所という組織を設けて、その一元的な管理に乗り出しますが、既に各地で商業ルートが確立されていたこともあり、大半は請負商人からの供給に依存しすぎてしまいます。

さて1860年代後半から日本の政治情勢は一気に流動化し、1865年の幕長戦争、1868年から1869年にかけての戊辰戦争により、日本は内戦期を迎えることとなります。この内戦は、1869年6月に函館の五稜郭が陥落したことで終結しますが、この内戦を生き延びた海軍の将兵、艦船、施設の多くは、明治新政府へと移っていきます。

横須賀製鉄所の建設を押し進めた幕府の勘定奉行小栗忠順は、完成した建屋を見て、信賴する部下栗本瀨兵衛くりもとせべえに「瀨兵衛殿、これで土蔵付きの売り屋くりもとじょうんとなりもうした」と語ったと、後にジャーナリストとして活躍した瀨兵衛（栗本鋤雲）が書き残しています。

小栗は幕府の滅亡を予見しながらも、必要な近代化を進められるだけ進めて、新しい時代へ残していくという明確な意識を持っていたようです。

1868年の王政復古以来、新政府の組織は目まぐるしく変わっていきませんが、軍事行政の面では翌1869年に軍務官ぐんむかんに変わって兵部省が設置され、更に1873年には陸軍省、海軍省に分離独立します。部隊運用の面では1875年に横浜に東海鎮守府が置かれます。この時、西日本の海軍拠点として九州に西海鎮守府を置くことも決められますが、これは計画のみで実施には至りませんでした。旧幕府からの接收艦と諸藩からの献上艦からなる軍艦3隻、運送船4隻の計7隻でスタートした明治海軍ですが、このうち軍艦の全てを含む5隻は幕府海軍から移管されたものです。

次に兵部省から陸軍省・海軍省が分離・独立した時の海軍省職員の出身藩比率を見てみると、職員約600名のうち、最も多いのが旧幕府出身者で全体の約3割を占めています。次いで、薩摩藩出身者は旧幕府出身者の約半数で全体の15%、長州藩、佐賀藩に至っては1/5以下の人数になります。

明治の海軍を考える時に、私達はしばしば薩摩の海軍というイメージに囚われてしまいがちなのですが、少なくとも海軍草創期は海軍卿以下の主要ポストの多くは薩摩藩出身者が押さえつつ、佐官・尉官級は圧倒的に幕府海軍出身者が多く、実務面で明治の海軍建設を支えるという現象が見られました。明治政府における幾つかの行政部門がそうであったように、海軍もまた、俗な言い方をすると幕府海軍の居抜きという形でスタートしたと言えます。

続いて、幅広い海軍の歴史の中でも、海軍と軍港という面を中心に駆け足でお話をします。

先ほど、1873年に日本海軍初の拠点として横浜に東海鎮守府が置かれたことは既に述べましたが、1884年には鎮守府は横須賀へ移転します。以来、横須賀は現在に至るまで日本における海上防衛力の一大拠点であり続けます。東海鎮守府の横須賀移転から2年後に制定された海軍条例では、日本の海域を五つの管区に分け、それぞれに鎮守府が置かれることになりました。1889年に呉と佐世保、1901年には舞鶴に鎮守府が置かれています。なお当初は、北海道にも鎮守府を置く予定でありましたが、計画段階で断念され、後に大湊に水雷団を置くという形で折り合いがつけられています。鎮守府が置かれ、艦隊が配備されれば当然そこには造修施設を始めとする基地機能が必要となってきます。そのため順を追って各地に海軍工廠が整備され、そこに全国から工員が集まり、彼らを顧客とする産業が生まれ、鎮守府を要する4市は軍港都市として発展をしていきます。

因みに幕府が建設した長崎と横須賀の製鉄所のうち、長崎製鉄所は三菱に払い下げられ、現在でも三菱重工長崎造船所として現存しています。横須賀製鉄所は一時工部省の所属となったほかは、日本海軍の造修機能の一翼を担っていきます。

横須賀製鉄所の建設を推進した小栗忠順は維新の動乱の中、非業の死を遂げますが、彼の事業はその死後、見事に花開いたと言えます。

では次に舞鶴について見ていきます。舞鶴には帝政ロシアの脅威が叫ばれていた1901年に鎮守府が置かれますが、舞鶴鎮守府はワシントン海軍軍縮条約を受けた海軍の行政整理の対象となり、1923年に要港部ようこうぶへと再編されます。しかし、第2次ロンドン海軍軍縮会議の不調により世界が無条約状態に突入すると、再び舞鶴に鎮守府が置かれることとなります。

このように海軍基地としての舞鶴を見た場合に、その盛衰は常に国際情勢に密接に関わっていたことが分かります。またこの間、関東大震災で全焼した横須賀の海軍機関学校が江田島での一時的な教育を経て、1927年に舞鶴へ移転ましまけんきんがくこうします。1930年に完成した学校の主要4庁舎は、当時の海軍省建築局長真島健三郎が提唱した柔構造の建築思想が取り入れられ、地震の揺れに耐えるというよりも、そのエネルギーをうまく逃がすという、当時としては画期的な思想で建築され、現在でも海上自衛隊の施設として使用されています。

1945年に終戦を迎えると、同年10月にアメリカ陸軍歩兵第133連隊の第1陣が舞鶴へと進駐し、旧海軍機関学校施設をその拠点とします。アメリカ陸軍による舞鶴進駐は10年間、1955年まで続き、旧海軍機関学校地区はキャンプ舞鶴と称されました。

最後に舞鶴と海上自衛隊、海上自衛隊が所管する日本遺産について簡単にご紹介したいと思います。

1945年の敗戦により、日本海軍は解体され、海軍省は同年12月に復員業務を主任務とする、第二復員省に改組されます。その翌年には同じく陸軍省から改組されていた第一復員省と統合して復員庁となり、1948年には更に厚生省の一部局へと縮小されています。舞鶴でも1945年に舞鶴鎮守府、海軍機関学校から改組された海軍兵学校舞鶴分校がそれぞれ閉庁・閉校となり、復員業務と

機雷掃海業務を残して海軍は解体されます。

海軍と軍港都市の関係全体で見ると、海軍の解体により主要産業を失った各軍港都市は、直ちに経済的な危機に見舞われます。例えば、横須賀市は海軍の解体により人口が35万人から20万人に激減しています。これらの軍港都市を平和産業都市に転換させ、新たな発展を促すために1950年に旧軍港市転換法が制定・施行されます。これは鎮守府が置かれた横須賀・呉・佐世保・舞鶴を対象とし、旧軍用資産を無料もしくは時価よりも安く払い下げて、民需の発展を促すことを趣旨としていました。舞鶴では海軍工廠の施設を継承した造船業、車両制作、繊維、そして企業誘致による化学肥料、硝子生産、木材の製材を中心に平和産業都市への転換が行われていきました。その一方で1952年に保安庁警備隊が新編されますと、舞鶴地方隊が編成されます。1954年に自衛隊が発足すると警備隊舞鶴地方隊は海上自衛隊舞鶴地方隊となり、現在では舞鶴の海上自衛隊は1個護衛隊群、1個航空隊を中心として日本海エリアの防衛を担当しています。遠方からお越しの方がおられましたら是非、北吸岸壁の護衛艦をご覧ください。から、お帰り頂ければと思います。さて、本日のセミナーの主題とも関わっているのが日本遺産です。日本遺産とは各地域の歴史や文化の魅力の発信、地域の活性化を目的として文化庁が2015年度に創設した制度で、有形・無形の文化財を織り込んでその歴史や文化の特色を分かりやすく表現するストーリーというものを認定する制度です。横須賀・呉・佐世保・舞鶴の旧軍港4市が共同で申請したストーリー「鎮守府横須賀・呉・佐世保・舞鶴 日本近代化の躍動を体感できるまち」、これが2016年4月に日本遺産に登録され、4市が足並みを揃えて、その魅力の発信に努めているところです。このうち、舞鶴では、海上自衛隊が所管している6つの施設と2つの資料群が日本遺産を構成する文化財として指定されています。激動の時代を乗り越えて現在に伝えられてきた歴史の生き証人でありますから、今後もより良い形で後世に伝えていけるよう、海上自衛隊としても取り組んで行きたいと思えます。

戦後長らく歴史研究の世界で軍事の分野が十分顧みられることなくきたこともあり、各地の海軍史跡に関するの事象研究の蓄積は、まだまだ不十分な状況にあります。昨年は、縁あって日本遺産に指定されている旧海軍機関学校庁舎が建築史上、どのような意義を持つ建物なのかを一級建築士の同僚と調べる機会を得ました。その成果物は、本日お配りしています資料の参考文献リストに載せましたURLで公開されていますので、ご関心のある方は是非ご覧ください。

今後もこうした地道な実証研究を積み重ねていくことで、日本遺産というものを側面から支援していければと思っています。私からのお話は、以上になります。ご静聴ありがとうございました。

【司会】

金澤 3 等海佐、ありがとうございました。

## 第2部 講演

### 2 「日本の20世紀遺産20選」

#### 【司 会】

お待たせしました。引き続きまして講演2は、日本イコモス国内委員会委員長西村幸夫神戸芸術工科大学教授からご講演いただきます。

西村先生は、東京大学、同大学院を修了された後、明治大学助手、東京大学助教授を経て平成8年から本年3月まで、同大学、大学院工学系研究科教授として教鞭を執られ、この間平成23年より25年まで同大学副学長を、平成25年より28年までは同大学先端科学技術研究センター所長を歴任されました。本年4月に神戸芸術工科大学教授に就任され、現在に至っておられます。

また、日本イコモス国内委員会委員長として舞鶴を含む旧海軍鎮守府4市の日本遺産認定に携わるなど、町づくりに造詣が深く、日本並びにアジアの歴史都市の保全計画立案に携わっておられます。最近の著書として、「県都物語」、「西村幸夫～文化観光論ノート」などがあり、この中でも歴史文化を活かした地域住民主導型の町づくりを提言されています。

本日は「日本の20世紀遺産20選」と題して、お話をさせていただきます。それでは西村先生、よろしくお願ひします。

#### 【西村幸夫氏】

皆さん初めまして、よろしくお願ひします。

今、金澤3佐の大変格調高いお話がありまして、私も勉強になりました。

今日、私がお話しするのは、日本の20世紀遺産というものを日本イコモスがつい最近発表したんですね。日本イコモスというのは国際イコモスの日本の委員会なんですけど、イコモスという組織自体は世界遺産の文化遺産を評価する組織なんです。最近ですと、今年からは日本からは世界遺産としてですね、長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産群というのが世界遺産にノミネートされておりまして、今月末に世界遺産になるかどうか決まるんですけども、つい1ヶ月位前に、これがうまくいきそうだというニュースが流れたと思います。これは世界遺産として認めるかどうかという評価をする組織がイコモスなんです。イコモスが「これは良い」といったということなんです。

そのイコモスが世界遺産を評価しているわけなんですけども、世界遺産は全体としてみると、やはり立派な芸術的作品みたいなものが出発点から多かったものですから、中身が少しバランスが良くないということも最近よく言われるんですね。日本でも一番最初に世界遺産となったのは法隆寺と姫路城、こういうのは誰が見ても芸術作品としても素晴らしいということになるわけですけども、そういう古くて芸術的に素晴らしいものだけが世界の宝ではないんじゃないかということですね、バランスをどういう風にとったらいいかということが、ずっと大きな課題になってきておりました。

その中で1つ言えるのは、最近のもの、ここでいう20世紀遺産ですね、20



世紀遺産みたいなものはちょっと少ないんじゃないか。20世紀の中でも建築家、有名な建築家の作品は日本でも西洋美術館が世界遺産のひとつになっていますね。ル・コルビジェの作品は世界遺産になっておりますけれども、こういうものは建築家が有名なものですから世界遺産になっているんですけども、それ以外ではなかなか少ないということで、国際イコモスが旗を振りまして、それぞれの国で20世紀遺産20選というのを選んで欲しいということ言われたわけです。日本がそのことを3年くらい掛けて選びました。そのメンバーがこのメンバーで、こうした近代遺産の専門家ですね。その中に舞鶴が選ばれているわけです。ですから、今日はまず20世紀遺産20選とはどんなものかというのをご紹介して、全体をご紹介して、その中で舞鶴のことに少し焦点を当ててお話をしたいと思います。

その前に、実は私は舞鶴に何度か来て、一番最初に来た時の写真があるんですけど、懐かしく今日拝見してます。というのは、最初に来たのは、1990年にここで赤煉瓦シンポジウム・イン舞鶴というのが行われたんですね。これがその時の様子なんですけども、その2年ほど前から舞鶴では東舞鶴をちゃんと元気にするような町づくりを舞鶴市役所のメンバーが中心となっていていろいろ活動を始められて、その中で赤煉瓦というものが東舞鶴には多いんじゃないかということで、そこに注目をして舞鶴建築探偵団というものが出来て、馬場英男さんという市役所のメンバー、今日も来ておられると思いますけれども、が団長になってですね、様々な赤煉瓦マップを作ったり、赤煉瓦のことを注目するということが始まったんです。今や、舞鶴の赤煉瓦は日本を代表する赤煉瓦の都市だということで有名なんですけど、それが始まったのは丁度30年前なんですね。その最初のキックオフのようなシンポジウムが開かれたのが90年だったんです。28年前です。

実は私は、その時に基調講演をする予定だった田村明さんという伝説的な横浜のまちづくりをやったリーダーの方なんですけども、つい最近亡くなりましたけれども、その方が基調講演をされるはずだったんですが、急に健康を害されました、それで私にピンチヒッターで出てくれといわれまして、私この時に基調講演を代打でやりました。その時初めて舞鶴に来たのです。

写真はその時の会場の風景なんですけども、それほど大きく全国に呼びかけられたわけではないと思うんですけど、500人位、会場満員でした。建築関係者、赤煉瓦を作っておられる事業所の方を含めてですね、全国から赤煉瓦ファンが集まって来て、その時現場を案内してもらっている時に、28年前の私も写っておりますけれども、当時の東舞鶴の駅前はこの感じでした。大きく変わってますね、28年前ですから。この右側が今日とった写真なんですけれども。

当時、建築探偵団が作った赤レンガマップです。確かこの頃に舞鶴の中心部だけで、50棟以上の赤煉瓦があるということで、その段階でですね、日本でもすごい集中しているんじゃないかということが動き始めたわけです。もちろんその頃、倉庫はまだ倉庫として生きていましたので、何処も今のように改装されていなかったわけです。

当時の赤煉瓦博物館はこんな感じでした。まだ本当に普通に何も使われずに市役所の横にあるという感じでした。実はもう1つ私は赤煉瓦博物館には貢献もしておりまして、それは今日も赤煉瓦博物館に寄って来ましたら、まだありましたけれども、1階の奥の方に世界の赤煉瓦が展示してありますが、あの中に私の持って来た赤煉瓦があるんです。

ミャンマーのバガン遺跡に仏塔が3000位あるのですが、それが殆ど煉瓦できていて、石造りの仏塔は4つしかないんです。私はユネスコの委嘱で3年間、ここで保存計画を立てるためずっと通ってたんですけども、舞鶴の人たちと付き合いがありましたので、赤煉瓦博物館が出来るということで、「この赤煉瓦を1個持ってきて欲しい」と言われまして、でも文化財ですから簡単に持ってくるわけにはいかない。持ってきて欲しいならちゃんと市からの依頼文を書いてくれと、こういうことで赤煉瓦が欲しいので譲ってくれという依頼状を英文で書いてもらいまして、それを持ってミャンマーに行きました。確か文化大臣本人だったと思いますけれども、実際、調査をしている中ですね、舞鶴という日本の町が赤煉瓦の博物館を作りたいと言っていて、此所の赤煉瓦を1つ欲しいと言ってるんだけど1つ分けてくれないかと本当に頼みました。そしたら凄いことに博物館に飾ってある1番大きな赤煉瓦を「これを持って行け」と言って、展示してあるそのものを、それには煉瓦に刻印がしてある、これが1番良いだろうと11世紀から13世紀までの煉瓦で、11世紀の煉瓦だと思いますけれども、それがこれなんです。貰ったのは良いんですが20キロ位あるやつですね、そんなの飛行機に乗って、お前何でこんなものを持っているのかと言われるものですから、こういうものだと説明するような文書を書いて貰いまして、荷物にも預けられないわけですね、割れてもいけないということで、手荷物で預けまして、そうするとチェックする所で何が入っているんだと言われるんですよね。またそこでも説明して、日本へ帰ってきて成田に宅急便で送りました。それが今でも飾ってあるというわけでありまして。これは昔懐かしいことでもあります。

さて20世紀遺産20選をどのようにして、日本の中で専門家が選んだわけですが、どういうことで選んだか。これは今日お配りした中に書いてあるのですが、当然ですけども20世紀に新たに登場したようなもの、それからもう1つは19世紀までにあるけれども20世紀に新しくそれが進化したたり、展開したもの、それから20世紀の歴史上の事件を象徴するようなもの、それから20世紀前からある伝統的なものであるけど、それと20世紀遺産とが両方合って、そこが面白いというようなものを選ぼうということです。それからもう1つは、そこに日本という地域性を象徴しているようなものを選びたいということでした。対象外としては、著名な建築家の作品というようなものは止めようと、何故かというそれは既に別のところで選んであるからということですね。こういうようにして選ばれたわけでありまして。

そして具体的にどのようなものが選ばれたかということ、まず最初、20世紀に新たに登場したものということで、装飾のないモダニズム建築といわれているものが幾つかあります。

それから大空間、非常に大きな空間ですが、19世紀までは鉄骨、鉄筋コンクリートがなかったので大空間が作れなかったわけで、木造ではなかなか出来なかったわけです。東京オリンピックの代々木競技場ですね。こういうものが出来るようになったという代表例ですね。大規模インフラ、土木的なもの、軍需施設と都市というところで舞鶴が選ばれているんですね。それから都市公園、都市周辺部の住宅地開発、そして保存再生されたというようなもの、こういうものを選んでいきます。

次に19世紀までにあるんだけど20世紀に進化・展開したものということで酒蔵群、有田の焼き物産業の景観、それから木造の温泉宿のようなものも選ばれています。

それからもう1つは外から来たものということで鉄道線路、洋風建築、砂防、建築産業。

次に歴史上の事件を象徴するという事で関東大震災の後で出来た橋、原爆が落とされたということから原爆ドームと周辺です。

伝統と20世紀の対比融合ということで、お寺の境内が都市公園になったというので上野の恩賜公園、城下町とモダニズム建築群ということで城下町の伊賀上野、境内とモダニズム建築がある神奈川県立美術館、庭園と近代水道の南禅寺界限、近代和風と現代建築ということで代官山の周辺、また伝統住宅と環境工学を一体化した京都にあります聴竹居、建築デザインと伝統とが混じったものとして代々木競技場というものを選んだわけです。それを1つずつ、ざっと見ていきたいと思います。

まず最初、これは番外編でして、何故これが番外かというのと、原爆ドームが既に世界遺産になっているので、これは世界遺産の可能性もあるということも一応念頭に置いております。しかし、全てが世界遺産になるわけではないということですね。原爆ドームだけではなくて、その周りがある原爆記念公園と、それから丹下先生がやられた原爆平和記念資料館、こういうものまで広げたらどうかということですね。具体的にどういう人がやったか、どういうものかということですね。そして場所としては此所がコアで、世界遺産とするとすればこれがバッファゾーンというふうになるのではないかとということです。これが番外編です。

次からが1番で、1番から順番で20番まであるのですが、1番から世界遺産になる可能性が高いものから並べようということになっているんです。

1番は何かというと、上野公園です。上野公園は寛永寺の境内だったわけですが、そこに様々な東京国立博物館や西洋美術館もあれば寛永寺もあるということで、新旧のものが混じって1つの公園になっているというのが20世紀的ではないかということですね。これはその具体的な中身です。日本イコモスの国内委員会のホームページに全体は掲示してあります。寛永寺の敷地はこれ位あって、これが今、寛永寺と公園になっているわけですね。赤いところがコアで、バッファゾーンが谷中の辺りではないかと。

2番目が代々木のオリンピック体育館ですね。これは丹下健三の設計なので有名建築家と言えば有名建築家なんですけど、丹下健三が作ったからというのでは

なく、先程も言いましたように、20世紀になって初めて出来た大規模な建築空間、これは吊り橋と同じような構造なんですね。屋根を吊っているんです。非常に珍しいということですね。具体的には、ここは明治神宮の一部だったわけで、代々木公園の中、代々木公園全体がバックヤードと考えても良いんじゃないか。

これはユニークなのですが、立山砂防施設群、これは富山の常願寺川という日本でも最も急流であると言われているんですけども、此所はですね、立山カルデラという幕末の地震で崩壊して4億立米の土砂が此所に溜まっていると。それが大雨が降る毎に流れ出ているんですね、それが富山平野を水害で苦しめていたということがあるので、これを止めるためにこうした大きな砂防施設を、砂を止めるダムを造ったのです。このダムが白岩砂防堰堤と言うものなんですけど、これは大小8つぐらいの堰堤からなるのですが、全体を合わせると100メートル以上の高さになるわけですね。これは恐らく世界最大なんです。何故かというところこんな急流な所に、下流にあんまり人が住んでいないんですよ、住んでても少ないものですから、ここまで砂防やる必要が、他の国にはないし、こういう急流そのものが珍しいものから、大変な規模となっている。現在、白岩砂防堰堤のほか2つの堰堤と合わせて合計3つで重要文化財になっているんです。これが具体的な中身でありまして、場所としては此所が富山湾です。これが常願寺川で、常願寺川に様々な砂防堰堤があるだけでなく、下流には霞堤という江戸時代の堰堤もあるということで、こういうのをセットにしようということで、これが3番目です。

4番目は黒部川の水系の発電施設、これは黒部第四ダム、黒四ダムで有名ですが、これを作るには大変な苦勞をして作った。この以前にも幾つかの発電所はあるわけですが、これをセットにして、発電施設を作って、発電施設を維持管理するためのトロッコで通るような道とかトンネルとか、そういうもの全体が作られていて、これは関西電力で発電して、実際に稼働しているわけですね。ということで、これは黒部川沿いにずっとダムや様々な発電所があるというセットになっているということでもあります。

次は瀬戸大橋。これだけの巨大なスパンの橋を日本人が作ったということで、吊り橋技術のシンボルだということです。これは様々な賞を世界で貰っているわけですね。

次に青函トンネル。これは世界最長の海底トンネル、こうやって見ていると土木の遺産が多いんですね。やはり20世紀に土木技術が飛躍的に進んだので、土木の遺産が多いのがよく分かります。これはその中身で、具体的にはこれが青函トンネルですね。

次は7番目で、世界遺産になる可能性が上から7つ目というのは結構高いと思いませんか。この中に、舞鶴の海軍施設と都市計画というのがあつたわけですね。これは軍港都市というのは此所だけではなく、横須賀にも呉にも佐世保にもあつたんですけども、残りは舞鶴がいい。それと計画された都市の部分もよく残つているということで、此所が選ばれております。海軍は同時に水の施設、水道施設を一緒に作つて、それが後の公共水道になるわけで、その施設が残つている。これ

が既に重要文化財になっております。これに関しては、後で紹介したいと思いません。具体的にはこういった所で、都心部全体が遺産だということになっているわけですね。周り全体が非常に広大な地域が選ばれて、また給水施設に関しては山の方にあるわけです。

8番目が南禅寺界隈の近代庭園群。これは琵琶湖疎水が出来て、水が得られるようになったことで、大きな池を使った庭園が南禅寺の近くにできたということです。個人庭園が多いので、なかなか入れないんですけど、よく公開されているのは無鄰庵の庭園ですね。これは山県有朋の旧邸です。実はここの水が琵琶湖疎水で、ここところが平安神宮なんですけど、南禅寺の周辺にはこれだけの見事なお庭があるんです。この中で公開されているのは無鄰庵のここと、平安神宮の周りに池があるんですね、庭園がありますが、これは同じ小川治兵衛という同じ庭師が作ったんですね。これが都市近郊の、琵琶湖疎水の水が出来たから出来たというお庭として非常に20世紀的ではないかということです。

そして隅田川の橋梁群、それから壊されることになっている築地市場とセットですね。関東大震災の後の土木工事として非常に価値が高いではないかと。具体的にはこれだけの橋梁と築地の市場ですね、今話題になっているところです。

迎賓館の赤坂離宮。これはもともと離宮として出来たものが、今は迎賓館として使われているということですね。こちらが東宮御所で皇族の方々が住んでいらっしゃるんですけど、こういう非常に広い範囲ですね。

聴竹居というのは、藤井厚二さんという京都大学の建築の先生が実験住宅として作った個人住宅なんですけど、今度の地震で少し被害があったと聞いています。日本の近代建築の代表例としても非常に有名です。大山崎にあり、周りも住宅地として、立派な住宅地として残しているということで、見学会などがよく開かれています。

箱根の大規模な木造の温泉旅館街、若しくはホテル街ということですね、箱根には大変そういうものが多いわけです。丁度、箱根の駅伝をやっている時に通りますね。

それから鉄道線路、肥薩線。これは元の鹿児島本線で、古い駅舎や鉄道のルート、それから橋梁などが残っているんですね。今は鹿児島本線はこちら側を通っておりますけれど、古い時代の鹿児島本線です。

これはモダニズム建築、旧の神奈川県立近代美術館というのが、実は鶴岡八幡宮の境内に建っているんですね。これは今、鶴岡八幡宮に返されて、壊されるかと皆心配したんですけど、残されるということです。一方では国宝館という和風の建物もあって、これはピロティ部分です。具体的には、この鶴岡八幡宮の中に近代美術館と国宝館があるということで新旧の対立が非常に珍しい、面白いというものです。

有田、有田焼の有田の町の風景、文化的景観ですね。具体的には非常に広い範囲で、有田焼の窯元があるということです。

そしてこれは東京ですけど、代官山ヒルサイドテラスという非常におしゃれな、槇文彦という建築家が作った一連の建築が通り沿いに点在していて、それが

地域に非常に面白いものを生み出しているということで有名なんですけども。こういう風に点在しているんですね、これが旧山手通り沿いにあると。これは全部ヒルサイドテラス、裏側にこの土地を持っていた朝倉さんの屋敷があり、これをセットでやりましょうというわけです。

小岩井農場。これは岩手県の農場で、小野・岩崎・井上という3人の人が出資をして出来た農場なんです。岩崎は三菱の創設者です。今、三菱グループが此所を持っているわけなんですけども、こういう非常に洋風の建物が残っていて、重要文化財になっているんですけども、そういう意味で畜産業の景観として非常にユニークであると。非常に広い範囲が牧場農場ということで観光施設にもなっているところなんです。

そしてこれは酒蔵ということで、西条、東広島の酒蔵群ということです。場所としてはこういう所で、西条、東広島駅の近くに残っているということです。

これはユニークなんですけども、東海道新幹線が入っています。実は東海道新幹線は、鉄道の専門家の間でも評価が高くて、将来的には世界遺産となるような1つではないかと言われているんです。何故かと言いますとね、この新幹線というのはレールから駅から全部新しいものを作っているわけですね。ヨーロッパの場合、鉄道線路はそのまま、鉄道の機関車の方の性能を上げてスピードを上げようとしたんですけど、日本ではなかなかそうはいかなくて、鉄道のレールの幅が狭かったものですから、鉄道のレールの幅を狭軌から標準軌に広げることが日本鉄道技術者の大きな夢だったわけですが、それを実現するためには全ての鉄道の線路を広げるわけにはいかないの、新たに線路を敷き直して、新たに線路を敷き直した時にはカーブが少なくて登り勾配も少なくて非常にスピードが出るような線路を新たに敷いて、そこに超高速の鉄道を走らせるという発想でやったわけですね。世界最高速を長期間保ったというので、この発想がヨーロッパのTGV、ユーロスターに輸出されているわけです。そういう意味で鉄道の概念を大きく変えた、そして経済的にも成功したという意味で世界的にもユニークだということで選ばれております。東海道新幹線ですが、これは生きているので、世界遺産にするには殆ど不可能ではないかと思うんですけど。

それから城下町の文化的景観という意味では、その典型的な例として伊賀上野ですね。城下町全体が良いんじゃないかということです。此所までが全体の20選です。

少し、残りの時間がないんですけど、舞鶴はどういうふうにして考えたら良いのかというと、舞鶴は軍港として選ばれたわけですけど、軍港を選ぶというのは海側の条件と陸側の条件があるということになるんですね。海側の条件としては、これは舞鶴市史にですね、海軍制度変革というのが引用されていて、「港内安全にして数十艘大小艦を泊するに足り、港口狹隘に過ぎず、また広漠に失せず、船舶の航通自在にして、防御を設くるもまた容易なるべき天険の良港を要す。」とあります。それはよく分かりますよね。

陸側の条件というのもあって、「余地ありて、風土も悪からず、飲料水に不足なく、また背後には防御に充つべき險要を有し、陸地輸送も不便なることなく、

またもって陸軍鎮台・衛所と交通連絡を得べきは最も必要なり」ということが言われています。海側の条件だけを考えると、孤立した非常に良い港なんですけど、そういう所は陸側からすると孤立した所が多いわけですが、そうであってはいけないと。陸軍ともネットワークを築けて、いい水が取れるというような意味で、陸側の条件もないといけない。そこが合ったのが舞鶴ということなんです。軍港を建設する時には、そもそも測量して海図も作らなくてははいけない、水深も測らなくてははいけない、気候もそんなに悪くてもいけないし、飲み水が本当にあるのか、建設資材があるのか、陸路のネットワークを築けるのか、土地を買収できるのか、埋め立てが可能か、土地の開削ができるのか、そしてそこにどういう人がいて、たくさん住んでいると移転させなければいけないという問題が起きますからそれをどうするのか、市街地を造成しないといけないわけですから、平べったい土地があるとすれば恐らく農地になっているので、農地を廃止しないといけないわけです。そこに様々な軍施設を作らなければいけない、それだけでなくインフラ、こうした様々なインフラを作らなければならないし、そこに都市も造らなければいけない。非常に大きな課題があるわけですね。そういう所に軍港都市が造られるわけですが、私は都市計画が専門なのでその目で見ると、軍港都市というのは他の所にはない非常にユニークな特色を持っています。それは非常に急激な都市化をするということです。最初から非常に綿密な都市計画を作っているところが他と違うところです。

ところがそこに男性が多い社会が出来る非常にアンバランスな人口構成、そして職業構成上、非常に職工の方が多というアンバランス、先程金澤3佐の話にもありましたように、国際情勢や戦争の影響で資金が左右され、それが都市開発に大きな影響を与えるということです。それから海軍御用商人が大きな影響力を持っているとか、大規模な倉庫が多いとか、鎮守府との関係をどのようにするか、それから建物疎開や戦災に最初にターゲットになるということで、そういう記録が日本側にも残ってますし、アメリカ側にもたくさん残っているところも非常にユニークです。

その中で舞鶴は作られている、先程も話があったのでお分かりと思いますが、これは1839年の地図ですけど、殆ど何も無いところに作っているわけですね。これは呉も佐世保も似たようなものですけど、呉や佐世保にはもう少し既存の都市があるんですが、舞鶴の場合は既存の集落がほとんどないところに非常にはっきりした明快な都市を造るんです。そこに急速に都市が出来ていくわけです。

ですからその意味で、ここでは非常に特殊な建物疎開がやれて、三条通りを広げることになるわけです。こうしたものが戦後の風景にも息づいているということでもあります。そして今の、こういうものにまで至っているわけです。ですからこうした都市の作り方からみるとユニークで、それは正に1901年に始まって20世紀が作った1つの典型的な都市計画であって、同時に海軍施設もよく残っているということで、これは日本を代表とする20世紀遺産として選ぶべきだというのが日本イコモスの議論だったわけです。以上です。ご静聴ありがとうございました。

【司会】

西村教授、ありがとうございました。



## 第2部 講演

### 3 「舞鶴の歴史文化遺産を活かしたまちづくり」

#### 【司 会】

お待たせいたしました。引き続きまして講演3は、舞鶴市副市長 堤茂様からご講演いただきます。

堤副市長は、立命館大学理工学部を卒業された後、舞鶴市に奉職されました。京都府庁への出向を経て、建設部門及び産業振興部門の要職を歴任されたのち、平成27年4月に副市長に就任され、現在に至っておられます。

舞鶴市では、市のブランドイメージである「赤れんが」「海・港」を活かした観光ブランド戦略の推進や高速道路ネットワークの完成などにより、近年、交流人口が大きく増加し、さらなる増加が見込まれています。

舞鶴市と防衛省との間においては、「赤れんがパーク」を中心に、隣接する海上自衛隊施設との連携・調和をはかり、地域防災機能を強化し、合わせて周辺一帯を一大交流拠点とするため、まちづくりのお力添えをしているところです。

本日は、「舞鶴の歴史文化遺産を活かしたまちづくり」と題して、お話をしていただきます。それでは堤副市長、よろしく願いいたします。

#### 【堤副市長】

皆さん、改めましてこんにちは。只今ご紹介いただきました舞鶴市の副市長 堤でございます。今日は、先程の金澤先生、それから西村先生のご講演の後、貴重なお時間を頂きまして、現在舞鶴市がこれまで取り組んでまいりました歴史文化遺産を活かしたまちづくりについて、簡単にご紹介をさせて頂きたいと思っております。

特に舞鶴は、舞鶴湾口で約5千年前の丸木舟が発見されたり、縄文時代の遺跡があったりという、大変古い歴史を持っておりまして、いろいろな歴史文化遺産がございます。特に、今日のテーマでございます「明治150年日本の近代化」ということで、舞鶴で海軍と軍都としての歴史の中で培われてきました近代化遺産、これについて特に赤れんが倉庫群を活かしたまちづくりについてご紹介したいという風に思います。

舞鶴市内には、赤れんが倉庫を勿論含めてですが、様々な近代化遺産がございます。先ほどもご講演の中にもありましたが、近代化を支える造船業でございますとか、工場群、それから今日ご紹介します倉庫、水道施設、鉄道施設、それから軍の様々な施設といったものがございます。舞鶴市内で調査をしましたところ、近代化遺産と言われているものは100以上の確認ができております。

若干幾つかをご紹介しますと、舞鶴市の与保呂地区というところで、旧海軍が整備した水道施設でございます。いわゆる貯水池、艦船は大量の水を供給する必要がございますので、旧海軍は水源を求めまして、このような貯水池を作っております。これは現在、国の重要文化財になってございますが、これを戦後、舞鶴市が引き継ぎまして、現在も水道施設として使っているものでございます。これ

は舞鶴の方はご存じかも知れませんが、旧北吸浄水場というものでありまして、かつて隣に市民プールがあったんですけども、そこにある配水池でございます。ご覧頂いたとおり、深さが5メートル余りの池になっており、導水の壁が出来ておりまして、全て煉瓦積みで出来た施設でございます。最近では、アートイベントなどに使用されております。

まだ十分に活用できていないれんが倉庫群、れんが建築物がございます。ここでございますのは、現在文部科学省が所管されております赤れんが倉庫3棟、それに左手に少し小さく見えますのが海上自衛隊が現在使っておりますれんが倉庫でございます。舞鶴市内には現在12棟の赤れんが倉庫が現存しておりますが、その内5棟が私ども舞鶴市の方で活用しております。まだ海上自衛隊で4棟、文部科学省で3棟、未活用或いは倉庫として使われているものがあります。「倉庫群」として、群れとしてこれだけの数があるのは、国内でも大変珍しいという評価をいただいております。

これは赤れんが倉庫とは少し違うんですけれども、現在舞鶴地方総監部の会議所として使われております、舞鶴海軍鎮守府初代長官の東郷平八郎が住まれてました官舎、長官官舎でございます、今は東郷邸という名前で残っております。これは海上自衛隊の方で現在管理をいただいております、毎月第4日曜日には一般公開をいただいております。写真の右上の方に和室が見えると思いますが、かつて東郷平八郎がこの部屋で瞑想したと言われております和室でございます。

その他に産業群として残っておりますのが、現在ジャパン・マリン・ユナイテッド舞鶴事業所がございます工場施設でございます。ここは元々舞鶴海軍工廠の施設でございます、それが現在も民間企業に引き継がれております。建物の中には写っておりませんが、100年前のクレーンも現在稼働しております。その他、この中には当時日本最大のドックも残っております、現在も現役のドックとして使われています。

これは鉄道施設、鉄道遺産として残っておるものでございまして、左側が北吸トンネルということで現在自転車歩行道になっております。右の写真は由良川に架かります、現在京都丹後鉄道の橋梁ですが、これは大正13年に建設された鉄  
鉄道施設でございます。下の方は伊佐津川橋梁で、明治37年に建設されたものでございます。

これはですね、まさに軍の施設でございます、砲台の跡でございます。先程、西村先生からもご紹介がありましたが、舞鶴軍港として湾内に建設されたわけですが、その軍港施設を守るために右の写真のように小高い山の幾つかにこのように要塞を作りまして、敵国が攻めてくる、海軍施設を攻めてくるのを守る砲台でして、このように現在も残っているものでございます。

それからこれは当時の海軍の官舎でございます、軍人の方が住まわれた官舎が現在も残っております。明治からの遺構で、現在もまだ使われている住宅もございます。

これは赤れんがを製造する窯でございます、舞鶴市の神崎地区というところ

に残っております。日本では、栃木県、埼玉県、滋賀県、舞鶴に4基しか現存していないそうですが、ホフマン式といいまして、これホフマン式輪窯りんようと読みますけれど、丁度ドーナツ型になった窯でございます。連続的にれんがを焼いていけるという大変合理的な窯でございます、こういう形で赤れんがを、当時は大量生産をしたわけですね。今から思えば手作り感の強い建築材料ということで、ご覧いただいたとおり、今は舞鶴で残っているれんがもですね、非常に風合いのある、人にとっても優しい建築材料になっております。

これが、先程も先生からご紹介がありました20世紀遺産に残りました都市計画の当時の地図でございます、ご覧いただいたとおり、東西の通りには三笠通り、初瀬通り、朝日通りという名前がついておると思いますが、これは当時の旧海軍の戦艦の名前を海軍が付けて、今もこうして使われております。ほとんどこの当時、明治35年に完成された町並みは、現在までほとんど変わっていないというところでございますし、先程ご紹介しました鎮守府の官舎もですね、地元の方多分お分かりと思うんですけど、この青く四角で囲んでおりますけれど、こういった所に現在も幾つか残っておるものでございます。

それで、舞鶴が赤れんがのまちづくりをこれまで進めてきたわけなんですけど、少し振り返りますと、ちょっと小さい字で見にくいかと思えますけど、舞鶴の赤れんがのまちづくりの特徴は、市民と行政の共同で積み上げてきたものだと思っております。

実は30年前に、ここに書いてますが、自主研究グループということで、舞鶴市の職員有志が、自主研究・自主研修をしようということでグループを作りまして、当時、大変先駆的なまちづくりをされてました横浜市に視察に行こうということで行ったわけです。そこで赤れんがの倉庫と出会いまして、そこから赤れんがのまちづくりがスタートしたものでございます。元々、赤れんがを見に行ったのではなくて、実は個人的には私もこのグループの1人でございます、横浜市を見に行ったのは、先程西村先生からもご紹介がございましたが、横浜市のまちづくりをリードされてました田村明さんという法政大学の先生にお会いして、横浜の精力的なまちづくりを勉強に行こうという形で行ったんですが、向こうへ行ってみるとまちづくりのテーマは赤れんがの倉庫を横浜市として如何に残すかというのが非常に大きなテーマになっておりました。それが今、よくテレビでやります横浜赤レンガとして、テレビコマーシャルとして盛んに使われておるんですが、あれでございます。

30年前は落書きだらけで、誰も近付かないような所にございましたが、それを何とか市民の手で活性化して残していこうという運動を聞きまして、それに触発された職員、先程ちょっとご紹介がございましたが、舞鶴市の職員、それから市民の有志が集まりまして、赤れんがのまちづくりをやっていこうということになったわけでございます。写真の右上の方に先程、西村先生にもご紹介頂きましたが、まちづくりの第1回の赤煉瓦まちづくりシンポジウムをやっておりますが、これは同じ写真でございます、平成2年だったと思えます。この場所は今はもうありません。これは現在赤煉瓦の5号棟と市政記念館の前に芝生広場がありま

すが、そこに建っておりました旧商工会議所の3階のホールでやったものでございます。以来、全国的な市民ネットワークが出来まして、赤煉瓦ネットワークができ、それから良く皆さんご存じですが、20年間、赤煉瓦ジャズ祭がここ赤れんが倉庫で取り組まれてきました。それと並行しまして、舞鶴市の方も様々な赤れんがの整備に取り組んだものであります。

これは先程もちょっとありましたが、当時の赤れんが博物館に転用する前の姿でございます。このように蔦が絡まって、周りが草ボウボウでございまして、中に入るのもちょっと怖いような、当時施設でございましたが、これをこのように赤れんが博物館として平成5年に整備をいたしました。

その後、順次、市が持っておりました赤れんが倉庫を市政記念館としまして、今ホールなどに使っていただいておりますが、このように転用をしております。

以後、3号棟ということで舞鶴の知恵蔵、それから4号棟、そして5号棟という形で整備をしてまいりました。この3号棟から5号棟までは民間の会社が倉庫としてお持ちだったのを、市の方が取得させていただいて、そして防衛省の支援もいただいて整備をしたものでございます。

赤れんがパーク、舞鶴をご存じの方は良くご存じだと思うんですが、赤れんがパークはこのように海上自衛隊の北吸棧橋、海上自衛隊総監部、先程の東郷邸、北吸の配水池といった近代化遺産群、それから舞鶴自衛隊施設に隣接したロケーションにある所でございます。

お陰様で、赤れんがパークはいろいろなイベントで活用いただくようになりました。先程のジャズ祭もそうですし、いろいろなイベントもやっていただいたり、ライトアップは勿論でございます。また映画のロケにも大変よく使っていただいております。最近では「日本で一番長い日」の映画ロケに使われたりしております。

中には物販として、このように京都北部<sup>ゆかり</sup>縁の物販施設を設けたりしております。結婚式やファッション・ショーなどにも使っていただいたりしております。

それから大きな大空間を使った展示ということで様々な展覧会、それから毎年1月には舞鶴市では成人式を5号棟という一番大きな倉庫中でやっております。これは夏の行事としてイルミネーションをやっております。

なお、こうした取り組みの経過、先程紹介もありましたが、平成28年4月に舞鶴市、呉市、佐世保市、横須賀市の旧軍港四市で日本近代化の躍動を体感できるまちという形で四市が連携した形で日本遺産に認定されたところでございます。

先程先生からご紹介ありましたが、20世紀遺産20選にもこうして選んでいただきました。お陰様で、舞鶴市も高速道路等の整備も相次ぎまして、ここ数年で観光、ビジネスでお越しいただく人口が大変伸びておりまして、いわゆる交流人口ですけども、このグラフのように、かつて150万人位の年間の交流人口が、今300万人に届こうかなという風になってきております。

赤れんがパークもリニューアルした頃は年間数万人のオーダーだったんですが、去年は70万人を越すお客さんに来て頂くようになりました。市では更にこ

の流れを掴んでですね、更なる飛躍をとということで、この年間来場者を150万人にするために更に赤れんがの拠点化を進めようという風に考えております。特にまだ、先程ご紹介しましたように、未活用な赤れんが倉庫が4棟残っておりますので、これを活用した形での整備をやっていきたいということで、例えば飲食ですとか、物販ですとか、宿泊ですとか、そういったものの機能を新たに付加する整備を考えていきたいと思っております、それと民間のそういったノウハウと資金を取り入れた形で、防衛省のいろいろなご支援をいただきながら整備を、今後、概ね10ヶ年をかけてやっていきたいと考えておるところでございます。

この完成パースは、丁度、北側から文庫山の頂上辺りを見たものでございまして、でき得れば文庫山学園、今高齢者福祉施設でございしますが、それを移転しまして、その跡地にこういった賑わい施設を持っていきたいというようなことを考えているものでございます。

舞鶴市では歴史文化基本構想というものを昨年策定しております。冒頭申しましたように、舞鶴市には様々な歴史文化が、赤れんが近代化遺産だけでなくございます。例えば西の城下町等にしましても、多くの歴史がございまして、遺産もございまして。そういったものを活用するのが大変重要だという風に考えております。その中で特に市民の方々と行政との共同というのを大きな方針と掲げてございまして、先程ご紹介しましたように、赤れんが倉庫群のまちづくりというのが正に市民の発意によってスタートしたものでございます。そのような形で、これからもこれを基本に歴史文化のまちづくりを進めていきたいということで、赤れんがモデルということにすると、舞鶴モデルとしてやっていきたいという風に思っております。

西の城下町は細川幽齋等の歴史がございまして、再来年、NHKの大河ドラマ「麒麟が来る」が決まりました。明智光秀とは直接関係ないんですが、明智光秀の盟友であった細川幽齋、忠興、明智光秀の娘細川ガラシャゆかりというのは、大変舞鶴とは田辺、京丹後にも大変縁ゆかりのある人物でございまして、そのような機会も得てですね、この西のまちづくりも積極的に進めていきたいという風に考えておるところでございますので、今日お見えの皆様方も是非、今後ともご協力ご支援の程よろしく申し上げます。

少し時間をオーバーしましたが、私からのご報告は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

#### 【司会】

堤副市長、ありがとうございました。